星居山伝説

宵の明星は円盤の降下

星居山（ほしのこ）霊験記

孝徳天皇の大化元年（645）、閏正月元旦の夕方、吉備国の山奥で天空が鳴動すると見るまに、奥山一体と麓を七里の広さにわたって真昼のようにパット明るく照らした。しかし、この光りも夜明けー日の出ころには消え去った。その翌日も同じような現象がおこったが、三日目には夜中になっても何事も起こらなかったから安心していると、まだ暗い明け方にまたまた天空の彼方に大鳴動がおこり昼のように明るくなった。しかし、夜がほのぼのと明けるに従い平常通りになってその後は何事もなかったように普通の日が続いていた。ところが、五月一日から三日まで正月と同じような大鳴動とともに、大光線が山内や山麓の七里四方を真昼のように照らす奇現象がおこった。それで里人たちが集まって情報を交換してみると、こうした不思議な現象がおこる地区は「阿知名山」であることが判った。そのころは諸国に不思議なことがおこると朝廷へ届け出なければならぬ掟であったので、里人たち一同が相談の結果、急いで朝廷に届け出た。

丁度そのころ大和国高尾山に小角行者が居たので、届出を受けた朝廷では小角行者を呼び出し至急、吉備国阿知山の調査を命じた。命令を受けた小角行者は四月三十日までに阿知山の麓につき五月一日山に登ると、その夕方から天空が鳴動して山内と麓の七里四方を真昼のように明るく照らした。小角行者は不思議な光に向かい『どうして不思議な現象がおこるのか、また光りの本体は何者だろう？』と質問したところ、遥か天空に声があり

“我は宵ノ明星なり。日本国中はもちろん星の世界まで悪鬼、悪魔がはびこらず、人々が栄えてゆくようにーと念願して、三個の明星が代わるがわる阿知山に天下ってくるのだ。明晩もまた来るだろう！”

と小角行者に一つの玉を与えて天空の彼方に消え去った。そして翌二日の夜半ころになるとまたまた天空が鳴動して光りが輝くと、こんどは光りが木の枝にかかったような形になって止まった。ーと見る間に光りの本体は小角行者に玉一つを与えたうえ

“国中の人々が栄えますように祈る！”

と宣言して天空の彼方に消え去った。そしてその暮方から夜明けにかけてヒンピンと代わるがわる降下してきた。そうした不思議な現象をつぶさに見届けた小角行者は阿知山を下り、奈良の都に帰って一部始終を天子に報告し、光りの本体からもらった“三つの玉”を差し出した。天子はうやうやしくこれをいただき、その年の八月になると小角行者を伴って天子自ら阿知山麓に来て“仮ノ御所”を建てて滞在せられ、九月一日いよいよ天子も阿知山に登って“宵ノ明星”を待ち給うたところ、五月と同じように天空が鳴動して光明が下り、山内はもとより山麓七里の一帯は真昼のように明るくなった。小角の報告は聞いて知ってはいたが、現実に見る不思議な現象に天皇はますます驚愕し山上で礼拝の日を送り、二日目に山から下って“宵ノ明星”から頂いた三つのたまに向かって祈り

『願はくば阿知山の峯に水を出さしめ給え！』

と夜もすがら祈願あそばされ、三日目に山に登って見ると不思議やコン〃

と清水が湧き流れていた。

天皇は自ら体験した明星の霊験奇瑞に、それからのちは夕方と夜中と明け方―三回は必ず三ツ玉を伏し拝み給うた。そして山麓の仮御所にご滞在せられたので、そこを“御所が原”と言い伝える。

天皇は日本三十三ケ所の霊場になぞらへて三十三ケ所の家を造り、各地から参拝する人々が宿泊する宿とし、山頂には角木造りの神社を建てて銅葺きの御殿に三つの玉を納めて「三玉神」と唱えてり。阿知山のことを

「星居山」と命名された。

このころ国々は乱れて百鬼夜行の有様であったが、いつとなしに平和な世となり天皇のご心痛もなくなった。十月になると天皇は奈良の都にお帰りになり、諸国にたいし一年に一度は星ノ居山に参詣するよう韓国のお布れを出し、天子自身も政務の暇をみては度々参詣あそばした。八度目に参詣されたとき

◎三つ星、人をめぐみに空はるゝ、光りを受けて生き立つ国々

◎星居山に身をおき年々に、四方の木草に花咲くをみて

の和歌を残して正月十三日崩御した。上段にある五丈余の石碑は孝徳天皇の御陵である。その後歴代の天皇の信仰も厚く聖武天皇の如きは三度も参詣せられ、神亀三年（726 年）このとき参詣のときには僧ー行基を同伴せられたほどであった。もって星の居山の信仰がいかに深かったかを知ることができよう。